芹沢光治良文学愛好会

南仏（コート・ダジュール、プロヴァンス、ルルド）紀行

2002.08.30～09.07

【日程】

１日：8/30	午前〈成田〉発		
	夜〈ニース〉		【ニース又はカンヌ泊】
２日：8/31	午前：	①エズ観光「鷲の巣村」	
		②モナコ公国観光	
	午後：	③ニース観光（シャガール美術館）	【ニース又はカンヌ泊】
３日：9/01	午前：	④カンヌ観光	
	午後：	⑤マルセイユ観光	【マルセイユ泊】
４日：9/02	午前：	⑥アルル観光	
		⑦アヴィニョン観光	
	午後：	⑧ポン・デュ･ガール観光	
		カルカッソンヌへ移動	【カルカッソンヌ泊】
５日：9/03	午前：	⑨カルカッソンヌ観光	
		ルルドへ移動	【ルルド泊】
６日：9/04	午前：	⑩ルルド観光	
	午後：	自由行動	【ルルド泊】
７日：9/05	午前：	ボルドーへ移動	
	午後：	⑪ボルドー観光	【ボルドー泊】
８日：9/06	午前：	パリに移動（T.G.V）	
	午後：	パリ発　日本へ	【機中泊】
９日：9/07	昼/夕刻　成田　解散		

以上

「先生の作品による南仏」と「自分が見た南仏」の感想

2002/9　　池田三省

【その１】「パリに死す」（１９４２年　婦人公論連載　(昭和１７年)　）

【マルセイユ】

鞠子が謙一への手紙の中で

（鞠子は、アングロサクソン文化（イギリス文化？）が東洋人を動物のように酷使している非人間的な冷酷な文化だと思っていたが）

・マルセイユに上陸したとたんに、ラテン文化、フランス文化がアングロサクソン文化とちがったものだと空気のように感じられた。

なにかしらほっと安心するようなもの、荒々しくなくてどんな異分子も包含してくれるようなもの。　人間の尊厳をおかすようなものではないこと。

【私の感想】

・「ノートルダム・ド・ガルド寺院」から 360 度の展望。

マルセーユの街並みの美しさとスケールの大きさと抜けるような明るさ（この明るさがラテン・フランス文化なのかもしれません）を体感した。

・16:00 からのミサの讃美歌を拝聴することができました。なんと美しい声の響きが心に響いてきました。

（ノートルダム・ド・ガルド寺院より）

【その２】「離愁」（１９４５年　刊行　（昭和２０年）　）

【マルセーユ・ピアストルホテル　】

・カランビエールの豪華なホテルであるのに、Ａ子は少なからず驚いた。

【カッシスの静かなホテル】

・マルセイユから西へ２時間行った海岸の漁港。

・離愁というが、カッシスの風景はもう日本の景色であった。

【私の感想】

・先生が、闘病を終え日本に帰国する前に、マルセーユの高級ホテル（ピアストルホテル）では、滞在費がかさむため、安価なカッシスのホテルに滞在したカッシスの漁港に行きました。

現在は、漁港ではなくリゾート地として多くの観光客で賑わっていた。

海岸には松林があり、先生はその景色に沼津の景色とだぶらせていたのではないでしょうか？　しかし、海が美しく透き通る紺碧の海でした。

（リゾート地のカッシス港）

【その３】「こころの旅」（１９６９年　刊行（昭和４４年）　）

【ヌベール】

・昭和３４年（６３才）パリ留学中娘達と「聖女ベルナデット」の聖体との対面。

日本人の尼さん（スール・マリー）との出会い。

【ルルド】

・独りで行ったら俗な観光地に感じられるかもしれないが、巡礼団に加われたお蔭で信仰の燃えるような聖地であることを知ったが、また、フランス人の信仰のあり方も知った.

・信仰は恩寵だけでは足りなくて、決断と実行が加わらなければならないのだろう。

【その４】「遠ざかった明日」（１９７２年刊行(昭和４７年)　）

【ヌベール】

・クララ（大塚の妻）と「聖女ベルナデット」の聖体との対面。

日本人の尼さん（スール・マリー）との出会い。（こころ旅では娘二人と訪問）

・この作品では日本人の尼との内容が詳しく書かれている。　この時代の先生の宿題であった「国家と個人」についての視点で日本人の尼の生き方を捉えた内容で書かれている。

【私のルルドの感想】

・私はカトリック教徒ではありませんが、単なる観光客ではなく、本当の信仰にふれて見たいと思い、夜中のミサ、早朝ミサに参加し、世界各国の人達と心をあわせて祈りました。（よく判らないのですが、ミサの最後に周りに居る各国の人達と手をとりあって、祝福し会う時は、大変感激しました。自然にお互いに微笑んでやさしく手を取り合うことができました）

・ルルドに居るだけで、心が癒されるというか、心が洗われるというのか、偉大なる大自然（神）の懐にいるような体験でした。

(ルルドの洞窟を背景に)

以上

【参考資料】　（「ヨーロッパ趣味の旅」のホームページより）

①**【エズ（EZE）】**（哲学者ニーチェが歩いた山道をたどる）

<概要>

ニースとモナコとの間にある「鷹の巣村」で、海賊からの攻撃を避けて山の斜面にへばりつくようにできた町です。

<見所>

駅から見上げる位置にある「エズ村」EZE-VILLAGE と称される小高い岸壁の上にへばりついた「鷹巣村」にあります。

町中は狭い路地が入り組んでいて迷路のようになっており、まるで中世にタイムスリップしたような感じです。町のてっぺんには熱帯庭園(JARDIN EXOTIQUE)があり、そこからの地中海の眺めは最高です。

【ニーチェの道】

「ツァラトゥストゥラかく語りき」は、エズの町に通じる山道を歩きながら構想が練られたという.。

(町の全景)

(町の地図)

②【モナコ（MONACO)】（大人のための最高級リゾート）

<概要>

ニースの西１８km にあるモナコはれっきとした独立国家です。でも、フランスとの間に国境もなければ、警察機能も通貨も言葉もフランス任せの国です。ただし、観光収入で潤っているこの国には税金がなく、国民はみなさん裕福そうです。なにしろモナコナンバーの車といったらほとんどがメルセデスの大型車なのですから。

<見所>

モナコ公国のモナコはレーニエ公の宮殿と海洋博物館を岬の上に構える旧市街です。フランスの由緒ある宮殿と比べるとちょっと「張りぼて」的で物足りない宮殿ですが、時代背景と国の規模から考えると大変なものです。

海洋博物館は地下が水族館になっている巨大な建物で､宮殿よりも立派かもしれません。博物館の斜め向かいのモナコ大聖堂(CATHEDRALE DE MONACO)にはモナコ王妃だった女優グレース・ケリーの亡骸が安置されています

（モナコ公国全景）

（グラン・カジノ）

(モナコ大聖堂)

（王宮前の広場）

③【ニース（NICE）】（マティスやシャガールが愛した華やかなリゾート）

<概要>

コート・ダジュールの拠点、リビエラの女王とうたわれるニースは高級リゾートではありますが、案外庶民にも楽しめるリゾートでもあります。

<見所>

お勧めは海岸線の通りプロムナーデ･ザングレ(PROMENADE DES ANGLAIS)の散歩。玉砂利の海岸にはプライベート・ビーチでのんびり過ごす人や、ビーチ・バレーに興じる人たちがいたり、皆さんそれぞれに楽しんでいます。通りにはローラー・ブレードで滑走する若者がいたり､ベンチに腰掛けて紺碧の地中海を眺めながら語らうカップルがいたり、こちらも人それぞれに楽しんでいます。通り沿いにはピンクの屋根が印象的な国定史跡のホテル・ネグレスコ(NEGRESCO)、カジノ有するメリディアン・ニース(LE MERIDIEN NICE)などの高級ホテルが立ち並びます。

海岸線から一歩奥にはいると優雅なマセナ広場(PLACE MASSENA)とマセナ公園(ESPACE MASSENA) があります。夏のバカンスシーズンにはイルミネーションが幻想的な噴水の回りには夜遅くなっても人が絶えません。マセナ通り(RUE MASSENA)にはカフェやレストラン、ブティックなどが立ち並び、こちらも夜遅くまで人が絶えません。

第二次世界大戦の戦火を逃れた旧市街(VIEUX NICE)は他とは異なった庶民的な雰囲気の地区です。最も有名なのがサレヤ(COURS SAREYA)の花市。花だけでなく、食料品、香料、雑貨等々色々なものが売られています。

（ニース・リヴィエラ海岸）

● 美術館(Chagall, Matisse)

ニース市内には沢山の美術館、博物館がありますが、その中でもとりわけ有名なシャガール美術館とマチス美術館をご紹介します。

シャガール美術館は高級住宅街シミエ地区にあります。入場料は 50Fr 程度ですが、モーゼの十戒を現した大きなシリーズは見ごたえがあります。フラッシュなしでの館内の写真撮影も自由。

マチス美術館にはマチスの彫像や彼が実際に使用したというカンバス等が展示されています。中身だけでなく、建物のだまし絵の窓も見ものです。

● 旧市街と朝市

ニースは第二次世界大戦で戦火に包まれ、建物の多くを焼失しました。でも、丘の麓の三角形の部分は奇跡的に戦火を免れ、近代的なニースの町において未だ昔の町並みを残しています。

とくに旧市街の朝市と花市は有名で、花売り娘が花を売り歩く姿は昔からの伝統です。モダンでハイセンスなニースですが、ちょっと早めに起きて庶民的な感覚で旧市街の朝市を散歩するのもいいものです

(旧市街)

（花市）

④【カンヌ（CANNES）】（銀幕のスターも憧れるカンヌ）

<概要>

まさに「超」高級リゾートという感じのカンヌです。人口７万人程度の小さな都市なのですが、海岸線のクロワゼット通り(BOULVARD DE LA CROISETTE)には庶民が足を踏み入れるのもはばかるような超高級ブティックや、カールトンやマジェスティック等の超高級ホテル、そして市営のカジノ（賭博場）が威風堂々と立ち並びます。さらにカンヌ映画祭になるとこれに世界の超高級スターが加わり、もう庶民の出る幕はないようです。

でも、クロワゼット通りの西端にある市庁舎辺りから少し斜面を登るように北へ向かった辺りには雑貨屋、パン屋、ワイン屋等々の下町的な町並みがあります。高級で清楚な町にもやっぱり庶民の生活があるんだと実感で、安心しました。

（海岸線のクロワゼット通り）

（カンヌの町並み）

⑤マルセーユ（ＭＡＲＳＥＩＬＬＥ）

人間の運命(第 6 巻・結婚)第 12 章より

マルセイユ港に着いたとたん、それまでの寄港地と違って、情愛にみちた優雅な文明の息吹を感じて、これがフランス文化であろうかと、初めて息をついて上陸して、パリに来たのだが、パリこそ、人間が善意と意思ををもって自然や人間の荒々しさを征服して、美と人間の幸福を典雅に作り上げた都会のように感じて、驚嘆した。

＜概要>

紀元前６世紀頃にギリシャ人が入植してから貿易都市として栄えはじめ、紀元前後には古代ローマ支配のもとで発展を続けました。長い歴史の間繁栄を続けたマルセーユです。第２次大戦以降も戦災から順調に復興し、人口１００万人を数えるプロヴァンス地方の政治と経済の中心都市となりましたが、最近では港湾の荷揚げ量の減少と北アフリカ等からの移民増加が経済状態を圧迫しているそうです。

<見所>

市内の中心を走るカヌビエール通り(La Canebiere)が最も賑やかな通りです。これに交差して沢山のショッピングストリートがあります。

高台にあるノートルダム・ド・ラ・ガルド教会(NOTRE-DAME-DE-LA-GARDE)はマルセーユ一番の観光名所です。ここからの地中海とマルセーユを囲む山並みは絶景です。マルセーユの人たちは何か物を紛失した場合にここのマリア様にお願いするそうです。あなたは何か無くし物はありませんか。

マルセイユ歴史博物館はカヌビエール通りの北側。ローマ時代からの遺跡が建物と公園の中に展示されています。公園内には野良猫が沢山いますよ。

景観がマルセーユらしいのはやっぱり旧港(LE VIEUX PORT)付近。現在ヨットハーバーとなっています。

モンテ・クリスト伯（岩窟王）の舞台となったイフ城(CHATEAU D'IF)への遊覧船は旧港のど真ん中から出発します。

（岩窟王の舞台となったイフ城）

（旧港とノートルダム・ド・ラ・ガルド教会）

⑥【アルル（ARLES）】

<概要>

ローヌ川沿いの町アルルは人口５万人の小さな町です。紀元前後の古代ローマ時代よりマルセーユをも支配下に置く大商業都市として栄え、５世紀には最盛期を迎えましたが、それ以降衰退してしまいました。このため、アルル市内には多くの古代ローマ遺跡が残っており、それらはUNESCO世界遺産に登録されています。

近代には印象派画家ヴァン・ゴッホが滞在したことやビゼーの歌劇カルメンに登場する「アルルの女」で有名となり、プロヴァンス有数の観光地となっています。

ぶらりと古代ローマの遺跡を訪ね、２０００年前の人々の優雅な生活に思いを馳せてみてはいかがですか。

<見所>

アルル市内の見所は、古代ローマ遺跡と印象派画家らが愛した趣ある町や美しい郊外の風景です。

町の中心にある古代ローマの円形闘技場(ARENES)は１世紀末頃の建築物です。136m×107mの楕円形の闘技場には２万人もの観客が収容出来き、今でも闘牛やコンサートなどに立派に使用されています。

古代劇場(THEATRE ANTIQUE)は更に古く紀元前25年頃のもの。幾つかの柱や劇場背後の建物の一部が残るのみで、あとは石材がゴロゴロと転がっています。でも、今でもしっかり１万２千人収容する舞台として活用されているのです。

サントロフィーム教会(EGLISE ST-TROPHIME)は7世紀頃の建造で、12世紀頃に追加されたポルタイユと称する門構え、中庭の回廊などが見所です。

ローヌ河岸の古代浴場はプロヴァンスに残る最大の浴場です。

町の中心から南東８００ｍくらいのところにあるアリスカン（LES ALYSCAMPS）は古代ローマの墓地です。並木の派生い茂る街道に沿って延々と石棺が続く様子（石棺の小径）は異様ではありますが、妙に落ち着いた感じで静かに散歩できます。奥にあるサン・トノラ教会(L'EGLISE ST-HONORAT)は１２世紀の建物です。

市内には印象派画家ヴァン・ゴッホが暮らしたアパート、足繁く通ったカフェ（彼の作品「星空のカフェテラス」に登場します)、自らの耳介を切り落として入院した病院、片耳の胸像などなど、彼に縁の場所が沢山あります。

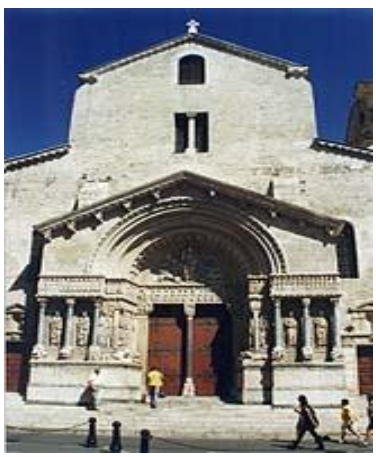
「ゴッホの跳ね橋」は町の南約２ｋｍのアルル運河(CANAL D'ARLES)に架かっており、近くに公共の交通機関もなく人通りのないところです。市内から殺伐とした工場地域を抜けて行きますので歩いてのお出かけはあまりお勧めできません。

「画家ゴッホの跳ね橋」

「円形格闘技の外側」

（円形闘技場の内側

(サントロフィーム教会のポルタイユ)



⑦【アヴィニョン（AVIGNON）】

<概要>

プロヴァンス観光の中心地の一つであり、パリからはＴＧＶ（高速列車）で約４時間。直径 1km 前後の楕円形のほぼ完璧な城壁に囲まれた人口 12 万人程度の地方都市です。アヴィニョンの橋の歌は皆さんご存知ですよね。

<見所>

紀元前６世紀頃にマルセーユから植民があり、以降古代ローマ時代にローヌ川港湾都市として栄えましたが、現在のアビニョンは何といっても１４世紀から約１００年間この地に滞在したローマ教皇の痕跡に特徴があります。城壁内の歴史地区は UNESCO 世界遺産に登録されています。

巨大な教皇宮殿(LE PALAIS DES PAPES)とその隣のノートルダム・デ・ドン大聖堂(CATHEDRALE NOTRE-DAM-DES-DOM)は見るものを圧倒する大きさです。石畳の宮殿広場(LA PLACE DE PALAIS)に立ち、周囲の建物を眺めなていると、フランスに居ながらローマカトリックの偉大さを感じます。

日本でも有名な「橋の上で踊ろよ♪踊ろよ♪」のアヴィニョンの橋とはここのサン・ベネゼ橋(PONT ST-BENEZET)のことで､踊ったのはローマ教皇を迎えた地元の住民だったそうです。今はその橋、ローヌ川の半ばで途切れています。

荘厳な教皇宮殿

アヴィニョンの橋

ノートルダム・デ・ドン大聖堂

⑧ポン・デュ・ガール（PONT　DU　GARD）

<概要>

ガルドン川をまたいでユゼスの湧き水をニームに運ぶための水道橋ポン・デュ・ガールはUNESCO世界遺産です。紀元前１９年に建造されたこの水道橋は３層からなり、高さは４９ｍ、導水路の長さは２７５ｍという壮大な古代ローマ遺跡です。９世紀までは水が流れていたそうです。

以前は水道橋のてっぺんを歩くこともできましたが、現在は水道橋へ登るための入口はふさがれています。川の北側から導水路に向かって山を上り、橋の付け根をさらに奥に進むと水道橋がきれいに見渡せるポイントがあります。夏場の繁忙期には川の北側から南側への一方通行になりますので、レンタカーの場合はアクセスする方向に注意が必要です。

【橋の全景】

【ガルドン川】

【橋の手前にある古いオリーブの木】

【橋のてっぺんは幅３ｍ弱】

⑨カルカッソンヌ（CARCASSONNE）

<概要>

フランスでは「カルカッソンヌの城を見ずして死ぬことなかれ」と言われるほど有名な、そして雄大な城塞都市であり、UNESCO 世界遺産に登録されています。

<見所>

シテの内部はまるでテーマ･パークの様に､まるで中世の町そのものが存在しています。ただし、メインストリートに所狭しと並ぶ土産物屋は俗物的ではありますが・・・。

夜のシテは城壁が美しく、幻想的にライト・アップされます。観光シーズンの８月に訪れましたが、夜１２時過ぎにライト・アップされた城壁の周囲を散歩しましたが、他にも多くのカップルが夜景を楽しんでいました。

この辺りで有名な食べ物は何といってもカッスーレ(CASSULLET)です。豆の煮込み料理で、鳥肉を入れたりします。

【城壁の夜景】

【オード川から見たシテ】

⑩【ルルドー】

【「奇跡の泉ルルドへ」竹下節子著の紹介ホームページより①】

「ルルドの泉」は日本でも病をいやしてくれる「奇跡の水」でよく知られています。芹沢光治良さんの晩年の「神のシリーズ」で、天から、ルルドに行けない人々のために、日本でルルドのお水と同じものを作るようにといわれ、神の水を作ったということが書かれています。　でもルルドについて、そこがどのような場所であるのか、知っている人は少ないかも知れません。カトリックの聖地ルルドについて、冷静に、そして共感をこめてかかれた本が竹下節子さんの「奇跡の泉ルルドへ」です。ルルド入門書としては、絶好の本といえます。

　ルルドは、夢の城、光と音のパレード、火と水、マリアというシンボルとしての若くて清純な女をそなえた、二十世紀末最大の「信仰」というテーマパークなのだ。しかも、巷のテーマパークなら健康なものしか行けないが、ルルドではお祭り広場がそのまま、貧者や病者を無条件で受け入れる「神の国」ユートピアになっている。それだけではない。ルルドは、「聖なるもの」の指標で埋まっている民間信仰の呪術空間でありながら、同時に、すべての科学主義者に門戸を開く最新医学の機関を擁する、先鋭的なまでに懐疑的な空間でもあるのだ。もっとも驚くべきことは、ルルドが、フランス経済界で無視できないほどの外貨を年間に獲得する巨大産業でありながら、個人や弱者にきめ細かく連帯を提供する人間的な姿勢を失っていないことだ。世界に１０億のカトリックは、数においてはその主流を中南米やアフリカという後進地帯に移しつつあって、貧しさや弱さに鈍感ではいられなくなっていることもあるだろう。けれどもルルドが人間的な優しさをもった巨大産業として機能していることも最大の理由は、ルルドにはベルナデットと聖母という核になる神話があって､その最初のメッセージを常に発し続けるエネルギーを保持していることだろう。

　ご出現の聖母の最後のメッセージはそのほほ笑みだった。

　今のルルドでは、町の人たちも、数多いボランティアの人たちも、巡礼者も、治癒のえられなかった病人さえも安らかにほほ笑んでいる。枯れることのない泉のように絶えず湧いてくるほほ笑みこそがマリアがこの地に残した最大の贈り物であり、希望という名の奇跡だったのかもしれない。(p186-187)

また、巡礼という行為にふれて、次のような文章があります。

　巡礼がひとつの信仰行為だということは、それが意味の旅であり、癒しの旅だということだ。たとえ出かけていった先で神の国を建設しても、あるいは失われた楽園を回復しても、巡礼者は、いつか、自分の出てきた場所にもどって、そこにこそ神の国を再現することを夢見ているのかもしれない。巡礼ディレクターの国際会議が出した声明の中の「回心の道」というのは、多くの人にとって、きっとそういう夢につながっている。

‥‥

　５００万人の人がルルドに行く。５００万人の人がルルドからそれぞれの故郷に帰ってゆく。５００万人の人がルルドで聖母という名の母に会い、大勢の兄弟姉妹に会う。ルル

ドではかならず自分より重い問題をかかえている他者に会うし、無償で奉仕してくれる他者にも出会う。人はルルドで、人を助けることを体験し、人に感謝することを体験する。そして自分と同じことを体験する人がたくさんいたこと、これからもたくさんいるだろうということを知るのだ。ルルドから帰ってきた人たちは、その意味で、もう二度と「独り」になることはないだろう。なぜなら、人生のうちでたとえ短い間でも、本当に他の人に「やさしく」なれた人は、やさしくした人と、いつまでもどこかで結びついているからだ。

そして、「意味」と「癒し」は、きっと、その結びつきからやってくる。 (p204-205)

【「ルルドの聖母御出現」ホームページより②】

【ルルドの洞窟（マッサビエルの洞窟）】

（１）概略：

聖母マリアは、１８５８年フランスのルルドで、少女ベルナデッタに現われた。ルルドは、南フランスのピレネー山脈の山麓にある町である。１８５８年２月１１日から４月７日まで、合計１８回にわたって御出現なさりました。「私は、無原罪の御宿りです。」と名乗られました。また、「罪人のために祈りなさい。」と言われました。

そのしるしとして、多くの奇跡がありました。特に、聖母に言われた所を掘ってみると泉が湧き出て、その泉の飲んだり、浸した病人が奇跡的に治る等のことが続発しました。今では、ルルドは有名な巡礼地となり、毎年５００万人以上もの人たちが訪れます。多くの病人たち（もちろん健康な人も）が訪れ、御出現のあった洞穴の前で、ミサ聖祭にあずっかて、ロザリオを唱えています。なんと、驚くべきことに、「どうぞ、私の病気を治してください。」と祈る者がなく、「み旨のままに」と大きな声で祈っていることであります。

（２）少女ベルナデッタの証言：

私が見たのは、年頃１６、１７の貴婦人です。私は、今までにあの方ような美しい婦人を見たことがありません。白い着物を着て、空色の帯を締め、右の腕にロザリオをかけていました。

貴婦人は罪人の改心のため祈るよう勧められました。私は貴婦人に接した時、私のみにくい心がとても気になりました。私はそれを正直に貴婦人に申し上げました。

最後の御出現の時、私は「あなたのお名前を教えて下さい。」とお願いしました。貴婦人

は神に感謝するかのように天を仰いでから、「私は無原罪の御宿りです。」と仰せになり、合掌なさいました。
　聖母は私に、「この世ではなく後の世で幸せな者にしてあげます。」とお約束下さいました。洞窟に現れた優雅さ、美しさは、生涯忘れることができません。

（注）「無原罪の御宿り」は、１８５４年に教皇ピオ９世によって、カトリックの信仰箇条として宣言されたばかりであった。ベルナデッタは教会の教えをよく知らなかったので、この言葉を知らないし、意味を理解できなかった。このことは、この御出現が本物である証拠となり、貴婦人が聖母マリアであることが明らかになったと言えよう。

（３）教会の承認：
１８６２年1月１８日に、約２年間に及ぶ司教区調査委員会による調査の結果、現地司教は、ルルドのマッサビエルの洞窟の聖母御出現を公的に認める教書を発布した。

（４）ベルナデッタの生涯：
１８４４年1月７日：ルルドにて生まれる。同年１月９日：受洗。
１８５８年：２月１１日より１８回にわたり聖母の御出現の恵を受ける。
１８６６年7月７日：ヌベール愛徳修道会の本部修道院に入会した。
１８６６年7月２９日：着衣式。同年１０月２５日：初誓願。
１８７８年9月２２日：永久誓願。
１８７９年4月１６日：帰天。（午後３時１５分）
１９３３年１２月８日：列聖。

　現在、ベルナデッタはヌベールの修道院の聖堂に安置されていて、棺の中で眠り続けている。遺体は現在も腐敗しておらず、巡礼者は目のあたりにベルナデッタを見ることができます。１９９４年、私はルルド、ヌベール、ファチマに巡礼に行き、その時ヌベールでベルナデッタを見てきました。実物を拝見してみますと、やはり言葉に言い表わせない感動がありました。機会があったらぜひ行ってみたほうがいいと思います。

（５）ルルドの奇跡の水：
ルルドのマッサビエルの洞窟にある泉から湧き出ている水は数多くの奇跡を起こし、多くの人の病気を治した。医学検証所による奇跡認定件数は、数百件にものぼっているが、教会当局から確認されたものは約６０件程度であるとのこと。
（注）ルルドの水をおまじないや､薬の代わりに使うことは正しい使い方ではありません。また、この水を営利目的で使用することは禁じられています。使うときは、マリア様に対して深い信頼と愛をおこして、心から感謝して使用しましょう。

⑪【ボルドー（BORDEAUX）】

<概要>

人口は約２１万人ですが、町並みは大きくとても立派です。

ボルドーと言えばほとんどの日本人はワインを思い浮かべるでしょう。確かにボルドー周辺は有名なワイナリーがひしめき合っているのですが、ここはフランスの科学工学の中心地でもあるんです。

町並みはどこか英国的な荘厳な感じがします。それも１２～１３世紀にイギリスの支配下にあったからでしょうか。

<見所>

町の見所は、パリのオペラ座（旧）設計者であるガルニエがヒントにしたという大劇場Grand theatre)、パリのノートルダム寺院に匹敵する規模のサン・タンドレ大聖堂(CATHEDRALE ST-ANDRE)、ひときわ高くそびえる大鐘楼(GROSSE CLOCHE)、ボルドー美術館(MUSEE DES BEAUX-ARTS)、等スケールの大きい建物が盛り沢山です。

<その他>

大劇場からサント・カトリーヌ通り(RUE STE-CATHERINE)付近は賑やかでショッピングに最適です。ブルス広場(PLACE DE LA BOURSE)のまわりにはちょっとお洒落なレストランやお店が集まっています。

【大鐘楼】

【サン・タンドレ大聖堂】

以上